

平成29年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成29年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ハタハタ

学名 *Arctoscopus japonicus*

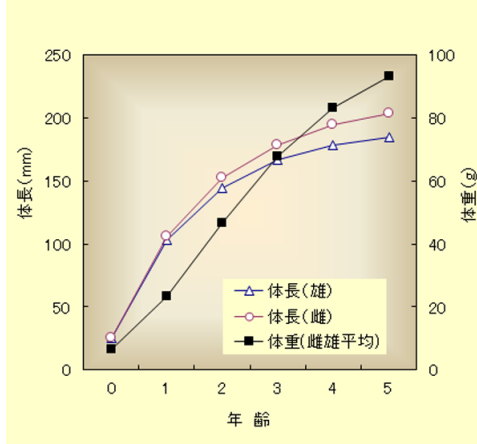
系群名 日本海北部系群

担当水研 日本海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 5歳（年齢および年級は、ふ化した年を生まれ年とし1月1日に加齢する表記）
成熟開始年齢： 雄：1歳（50%）、雌：2歳（100%）
産卵期・産卵場： 12月上・中旬、主に秋田県沿岸の藻場
食性： 端脚類、橈脚類、オキアミ類、イカ類、魚類
捕食者： 大型魚類（マダラ等）

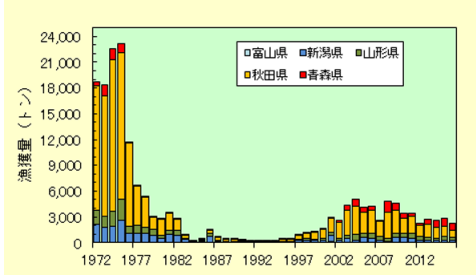


漁業の特徴

青森県～富山県では、春と秋および冬の産卵期の前後に、小型底びき網(小底)や沖合底びき網(沖底)により漁獲されている。小底と沖底をあわせた底びき網による漁獲量が全体の約5割を占める。また、ハタハタの産地として有名な秋田県およびその隣県の浅海域では、産卵期にあたる12月上中旬に、定置網、底建て網、刺網で漁獲されており、それらの漁獲は全体の約5割を占める。

漁獲の動向

漁獲量は、2万トン程度あった1970年代前半から1980年代にかけて急激に減少して1991年は158トンとなった。この急激な悪化を受け、秋田県が3年間禁漁し、2003年には3,000トン以上にまで回復した。しかし、2012年以降再び減少しており、2016年は2,231トンであった。直近5年間(2012～2016年)の県別漁獲量では、秋田県が全漁獲量の4～6割を占めるとともに、2013年以降、青森県の割合も高く、2～4割を占めるようになっている。



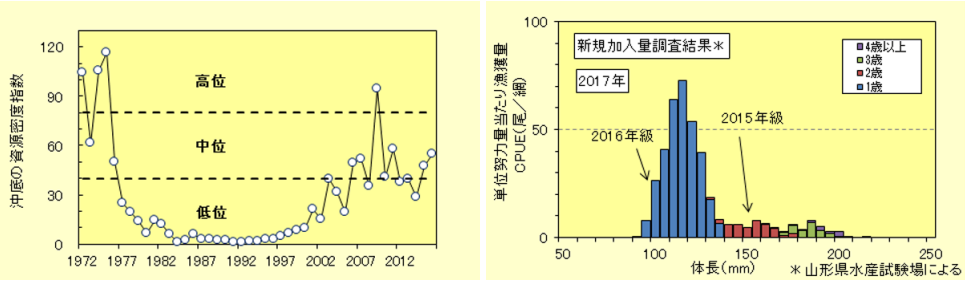
資源評価法

沖底の資源密度指数を資源量指標値とし、それに基づき資源状態を判断した。また、山形県水産試験場により山形県加茂沖において4～5月に実施された新規加入量調査ならびに漁獲物の体長組成に基づき、近年の年齢組成および各年級の豊度を推察した。

資源状態

沖底の資源密度指数は、1995年以降、大きく変動しつつも増加傾向にある。資源水準の境は、1972～2016年の資源密度指数の最高値およそ120を三等分し、高位と中位の境を80、中位と低位の境を40とした。2016年の資源密度指数は54.9であり、資源水準は中位と判断された。資源動向については、直近5年間(2012～2016年)の資源密度指数の推移から増加と判断された。なお、新規加入量調査の結果から、2018年に漁獲の主体となる2015年級と2016年級の豊度は低いと推察されている。





管理方策

資源水準および資源量指標値(沖底の資源密度指数)に合わせて漁獲を行うことを管理方策とし、2018年のABCを算定した。なお、資源水準は中位、動向は増加であるが、2018年に漁獲の主体となる2015年級、2016年級の豊度は低いことから、過度に漁獲することのないよう配慮すべきである。

管理基準	Target/Limit	2018年ABC (百トン)	漁獲割合 (%)	F値 (現状のF値からの増減%)
0.9・Cave3-yr・1.30	Target	24	—	—
	Limit	30	—	—

- Limitは、管理基準の下で許容される最大レベルの漁獲量。Targetは、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される漁獲量
- ABC算定規則2-1)に基づき、ABCは $ABClimit = \delta_1 \cdot Ct \cdot \gamma_1$ 、 $ABCtarget = ABClimit \cdot \alpha$ で計算した。係数 α には標準値0.8を用いた
- 係数 δ_1 は、水準決定方法を考慮した中位水準の標準値の0.9、 Ct は2014～2016年の平均漁獲量(Cave 3-yr)である2,539トン
- γ_1 は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/l)$ で計算をし、 k は係数(標準値の1.0)、 $b(13.3)$ と $l(43.6)$ は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間(2014～2016年))
- ABCは十トンの位を四捨五入した

資源評価のまとめ

- 資源水準は中位、動向は増加
- 2018年に漁獲主体となる2015年級や2016年級の豊度は低い

管理方策のまとめ

- 資源水準および資源量指標値(沖底の資源密度指数)に合わせて漁獲を行うことを管理方策とし、2018年のABCを算定した
- 資源水準を維持するため、過度に漁獲することのないよう配慮すべき

執筆: 藤原邦浩・八木佑太・飯田真也・佐久間啓・吉川 茜・松倉隆一

資源評価は毎年更新されます。